オーストリア文学とハプスブルク神話

クラウディオ・マグリス
鈴木隆雄・藤井忠・村山雅人訳

書肆 風の薔薇

オーストリア文学とハプスブルク神話

一九九〇年八月三〇日初版第一刷印刷
一九九〇年九月一〇日初版第一刷発行
著者——クラウディオ・マグリス
訳者——鈴木隆雄・藤井忠・村山雅人
発行者—鈴木宏
発行所—株式会社　書肆風の薔薇
東京都文京区小石川二-二-一四　一楽ビル
郵便番号一一二　振替東京五-一三七六四
電話　〇三-八一八-六〇四〇
FAX〇三-八一八-二四三七
用紙——岡田紙店
印刷所—ディグ
製本所—関口製本

発売所—白馬書房
東京都文京区小石川二-二-一四　一楽ビル

ISBN4-89176-237-3
乱丁・落丁本はお取りかえ致します。

オーストリア文学とハプスブルク神話

クラウディオ・マグリス
鈴木隆雄・藤井忠・村山雅人訳

書肆風の薔薇

1918年、オーストリア・ハンガリー二重帝国は崩壊した。《オーストリア帝国、ハンガリー帝国、ボヘミア王国等々、皇帝フランツ・ヨーゼフの全称号が表わすハプスブルク家世襲の諸領邦において教養を身につけた作家たちは、彼らの精神の形成期であった昨日の世界に目を向ける。過去となったあの世界こそ、人間としての、また芸術家としての個性を展開するうえで出発点であったと彼らは感じていた。(……) 彼らの詩的体験は、過去との切り離せぬ結びつきから、そして彼らの記憶や夢に、言い換えれば文化に内在する神話から出発しているのである。》

本書は、オーストリア文学の展開を、中欧世界を支配したハプスブルク帝国の歴史的伝統と重ね合わせることによって、その唯美的な文学の人工楽園のトポスに潜む、現実逃避的な傾向、あるいは「超民族主義」「官僚的」「不動主義」「快楽主義」といった精神性を剔出する。ビーダーマイヤーの時代の作家から、グリルパルツァーやシュティフターを経て、シュニッツラーやホーフマンスタール、そしてヴェルフェル、ロート、ムージルに至るまで、その文学の営みは一貫して《ハプスブルク神話》に呪縛されている。過去を追想し、現状維持を原則とするオーストリアの政治的社会的状況との対決が回避されるかぎり、作家たちの自己探究の旅はいつ終わるとも知れぬ心の不安に疼き、焦燥感は癒されることはない。だが、そうした現実疎外が美的に昇華されたところにこそ、オーストリア文学の汲み尽くせぬ魅力もまた存在するのである。

発行＝書肆風の薔薇
発売＝白馬書房
定価＝6180円（本体6000円・税180円）

ISBN4-89176-237-3 C0098 P6180E

オーストリア文学とハプスブルク神話

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com

オーストリア文学とハプスブルク神話

クラウディオ・マグリス

鈴木隆雄・藤井忠・村山雅人 訳

書肆 風の薔薇

凡例

1　本書は、*Il mito absburgico nella letteratura austriaca moderna*, Torino 1963のドイツ語版*Der habsburgische Mythos in der österreichischen Literatur*, Salzburg (Otto Müller) 1966の初版の全訳である。

2　人名や地名等の固有名詞は原語読みとしたが、日本で一般に通用している表記に従ったものもある。

3　原文中の作品名を示すイタリックは『　』に入れた。

4　原文中、文字の間隔を割って強調された言葉はその訳語に傍点を付した。

5　ラテン語その他の語句や単語に関しては訳語、訳文にルビを付し、必要に応じて「　」に入れた。

6　原文のコロン、セミコロンは適宜読点や句点で置き換えた。またダッシュや括弧はできるかぎり残したが、訳文との関係から削除した場合もある。さらに、必要に応じて改行を施したり段落をつけたりもした。

7　原注はすべて算用数字で示し、末尾に一括して掲載した。典拠として挙げられた作品標題や論文名、また全集などの巻数、頁数も原語のまま転記した。

8　訳注は本文中に割注で記したが、読む際の煩わしさを考慮して最小限にとどめた。

目次

序論――15

第一章　ハプスブルク神話の成立

一　ハプスブルク神話の起源と政治的機能――41

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

二　啓蒙的絶対主義の時代とその文化――48
三　民衆喜劇における神話化の過程――54

第二章　ビーダーマイヤーの時代

一　オーストリアのビーダーマイヤー――67
二　正統主義の文学――71
三　「体制」への抗議――88
四　オーストリアを訪れたドイツの作家たち――101
五　ウィーン喜劇、諷刺と讃美の間――108
六　フェルディナント・ライムント――124
七　ヨハン・ネストロイ――130
八　エピローグ――138

第三章　フランツ・グリルパルツァー、秩序と時代の流れ

一　一八四八年とオーストリアの作家たち――141
二　グリルパルツァー――149

三　『オトカル王の幸福と最期』――157
四　『主君の忠実な下僕』――164
五　『貧しい辻音楽師』――169
六　「汝の陣営にオーストリアはある」――173
七　『リブッサ』――179
八　『ハプスブルク家の兄弟争い』――187
九　晩年――194

第四章　ハプスブルク的郷土文学

一　アーダルベルト・シュティフター――203
二　『晩夏』――216
三　『ヴィティコー』――220
四　マリー・フォン・エーブナー＝エッシェンバッハ――225
五　帝国の東部国境地帯――231
六　ペーター・ローゼッガー――239

第五章　オーストリアの終焉（フィニス・アウストリアエ）

一　美しき青きドナウ――247
二　死にゆく文化の苦悶――256
三　断章の文化――270
四　フェルディナント・フォン・ザール、没落する者の威厳――278
五　アルトゥール・シュニッツラー――291
六　フーゴー・フォン・ホーフマンスタール――307
七　カール・クラウス、黙示録と非神話化――332

第六章　昨日の世界――今日の神話

一　第一次世界大戦後のハプスブルク神話――341
二　群小作家の小説――349
三　ハプスブルク的形而上学――358
四　ヨーゼフ・ロート――363
五　フランツ・ヴェルフェルとシュテファン・ツヴァイク――375
六　ハプスブルク的ヨーロッパ主義、チョコアとシュライフォーグル――385

七　ローベルト・ムージルの宗教的社会学――392
八　ネオ・バロックと東からの風――413
原注――431
訳者あとがき――477
人名索引――491

序論

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com